
人のユメ

びよ彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人のユメ

【Nコード】

N6524C

【作者名】

びよ彦

【あらすじ】

努力をしない青年がいた。いや、努力を「捨てた」青年がいた。その青年は、ほんの些細な経験から、生き方・価値観が大きく変化してしまったのである。しかし、大学という価値観の坩堝で彼は「興味」を持った人間と関わりあい、そして何かを見出そうとする。彼が見出したものとは、そして彼が求めていた答とは何なのか…。

第1話：始まりの不合格（前書き）

この度、人生で初めて小説の執筆に挑戦させていただきました。そのため、非常に拙い文章になっていると思います。様々な読者様からのご意見・ご指摘をお待ちしております。

第1話：始まりの不合格

「2004……2009……20……あ。」

彼の番号である2011はそこに無かった。しかし彼は特別悲嘆するでもなく、その「事実」を確認すると、合格発表の掲示板に背を向けた。隣では体育会系のクラブ在校生が、合格者の胴上げを行っていた。彼はその光景を、ただ冷ややかに見つめていた。

「ま、こんなもんだろ。」

彼は表情を全く変えることなく、ただ帰路についていた。すれ違う人の多くは緊張した面持ちだった。自分もあんな表情をしていたのだろうか。そんな顔をしていた自分を想像すると、滑稽でたまらなかった。こうなることは18年前から定められていたはずなのに……。

その青年の名は神村大地。たった今、第一志望校としていたF大学の不合格を告げられた18歳の男である。とりあえず親に知らせておこう、彼は携帯電話をとった。母親が息子からの電話がかかってくる時間を知りえていたかのごとく、その呼び出し音はすぐ鳴り止み、向こうから母親の声がやってきた。

「大地？」

「……あ、もしもし、うん、俺。大地。」

「どうだった？」

開口一番に母親は尋ねてきた。

「うん、無かったよ。」

「……そう……。」

「……いや、別に無理になぐさめようとしなくてもいいよ。俺、そんなにシヨック受けてないし、それに押さえの大学には受かってるか

らさ。」

「うん…。ま、とにかく早く帰っておいで。これでつらい受験生活も終わったんだから。」

「うん。わかった。じゃ、また後で。」

つらい…。いや、つらくはなかった。彼は受験、ひいては大学にそれほど意味を感じていなかったから、骨身を削るような受験生活は送っていなかったのだ。受験と関係のない夢を持っていたわけでもない。ただ、自分にとって行く大学がどこであろうと、それほど重大な意味は持っていなかったのだ。同時にそんな気持ちでいる自分が志望校に受かるはずがない、ということも悟っていた。だから彼は努力という手段をとらなかった。しかし彼はそんな自分を悔やんではない。現に不合格を告げられても、粛々と受け止めている彼の様子そのものが、何よりの証であろう。シヨックを全く受けなかったか、といわれれば決してそうではない。ただ、用意されていた結果を受け止めきれただけの話だ。不合格で泣き崩れる受験生は、その不合格という事実を受け止め切れていない、ということだ。彼にはそれを受け止める心の準備が整っていた、ただそれだけのことであった。

こんな日に限って、空は快晴だった。合格者は、
「良いことのお告げだったんだ。」

なんて、後付のくだらない解釈をするんだろう。そんな強い太陽の日差しを受けた大地は、

「うぜーな…」

と、小声で呟いた。その瞬間それ違った人が一瞬振り返って大地を睨み付けたが、彼にはそんなことは見えていなかった。ただ、太陽が「うざ」かった…。

可否の事実に関係なく。

第2話：離別より…

あれから約二週間。久しぶりに学校にクラスメイトが集まる日が来た。卒業式の予行演習の日だ。合否の話を自ら持ちかけていく者は誰一人としていなかったが、個々の顔を見れば、その合否は一目瞭然だった。今にも泣き出しそうな顔をしている者もいた。

「…やっぱりな…」

小声で大地は呟いた。

人付き合いが特別悪いわけではない大地であったが、この状況下だ。誰に何を話しかけてよいかわからなかった。しかしこのことも大地は予測済みであり、家にあつた興味もない小説をとりだし、読んでいるフリをしていた。

そこに一人の男子が寄ってきた。

「よう、大ちゃん。」

クラスメイトの柳原徹だ。大地と特別仲の良かった男子生徒である。

「あ、おつす、徹。」

「いよいよこの高校ともお別れの日が来たなあ。」

この機嫌の良さから察するに、徹は合格したのだろうが、大地はあえて触れなかった。この日の受験に関する話はタブーであることは、クラス全員、いや高校3年生全員が既知のことである。

「うん。ま、特に3年間何もなかったけどなあ、俺。」

「何悲しいこと言ってるんだよ！ 修学旅行とかあるじゃんか！」

「ああ、まあそうだけど。でも良い経験はさせてもらったよな。」

「だろ？ 高校は高校の、大学は大学の、良い経験があるんだべ！」

「…かな。」

大地は思った。自分から使った言葉ではあるが、自分自身にとっての「良い経験」とはどういう経験のことを指すのか、と。いや、違

う。大地は自分にとっての良い経験とは何か、という定義そのものは持っていた。むしろ、今自分が考えているその定義は本当に良い経験なのか、を考えていた。しかし、その考察時間は極めて短いものとなった。大地は、この考察自体、自分にとって有意性を持っていないと悟ったからだ。自分にとっての「良い経験」は、あくまで自分にとって、の問題だ。他から作用される必要は無い。その主体である自分がそう考えているのだから、何も迷う必要がない。…無駄だ。

「大ちゃん？ さつきから黙りこくって、どうしたんだよ？ 何か悩みごとか？」

「ん…別に。」

「そっか。まあ、お前が急にだんまり決め込むのは珍しいことじゃないけどな！」

「なんかその言い方ひといなー。」

「…こんなやり取りを学校でするのも明日で最後か…」

「だな。」

「なあ大ちゃん。俺ら大学行っても友達でいような、絶対！」

「…ああ。」

と、微笑んで返した大地であったが、彼にはよくわからなかった。友達とは何か？ 何をどうすれば友達で居続けられ、どうしても言えば友達で無くなるのか。そして友達は自分にとってどのような意味をもたらすのか、あるいは必要なのか…。そんな葛藤を憶えたものの、柳原との高校生活最後となるうやりとりは、神村自身も惜しみなく楽しんだのだった。

そして翌日、卒業式も終わり、本当に高校生活が終わりを遂げた女子生徒のほとんどが別れを惜しんで泣いていた。大地はというと…当然、いつもと変わらぬ態度であった。いや、大地に限らず男子生徒は皆そうであった。男性はこういう状況では、サッパリとしたものなのである。この中に、何人自分と今後も変わらず付き合っていく人間がいるだろうか。ま、いなかったとしてもそれはそれで

いいだろうな…なんて考えていると、柳原を始め、クラスメイトの多くの男子が大地に声をかけてきた。

「今日で最後だから飯食いにいくんだけど、大地も行こうぜ！」

「あ…悪いけど俺、ちよつと外せない用事があつて…。ごめん。」

「なんだ…それじゃあ仕方ないな。神村！俺らのこと忘れんなよ！」

「またいつか会おうぜ！」

「元気でやれよー！」

大地に向けて別れを惜しむ声が飛んできた。

「うん、ありがとう。それじゃあ…皆も元気でな。」

大地はそう言い残すと、一度を振り向くことなくその場を離れた。

完全に大地がその場から姿を消した後、一人のクラスメイトが言った。

「神村つてさ、なんかこう…もう一步深く踏み込んでいけない奴だったよな。」

「あー、それわかるな。何かいつもちよつと壁感じたりして…。」

「不思議な奴だったな。」

それを傍で聞いていた柳原は、なんとも言いようのない不快感が募った。

「神村…。」

その不快感は何ゆえ生じたものかは柳原自身、はっきりわからなかった。仲の良かった大地のことを、皆あまり理解していなかった事実によるところだけではないだろう。

帰宅途中、大地はまた考え出した。

「何で俺は誘いを断つたんだろ…。」

そう、彼には特に用事などなかったのである。この時にはすでに大地の思考回路は、もはや彼自身でも理解できないほど複雑なものとなってしまうたのかもしれない。その思慮深さゆえに。

もうその頃には日も落ちかけていた。大地の背後に立っている人

間には、大地が夕日に溶け込んでいくように見える、まさにそんな時間帯であった。目の前に大きく立ちはだかる「目の敵」に対して、大地はまたも、

「…うざいな、てめえ。」

と言い放った。当然、周囲の人から見れば、滑稽かつ奇妙な言動であるう。しかしそれをないがしろにするほどまでに、大地は太陽が嫌いであった。

その怒りにも似た感情を押し殺したまま、彼は自宅に着いた。そして自室にて、改めてある決意じみたものを卒業証書の裏に書き記した。

「自分は自分だけ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6524c/>

人のユメ

2011年1月24日12時54分発行